古典解釈と語の文法的な識別

小林芳規

はじめに

ここにいう「語」とは、今日の規範文法で品詞に分類するところの「単語」だけをさすのではなく、いわゆる接尾語や複合助詞をも含めた便宜的な呼び名とする。古典の読解には、接尾語や複合助詞と他の単語とを識別してその意味の相違をつかむことも、品詞を異にする或る種の単語同志を識別するのと同程度に必要だからである。

古典の読解に当つて、一語が意味を転じたり、語性を転成して多義を持つたり、同音節の語で意味の異なつたりする二語以上を識別することは有用である。語の意味の相違が、ことばの形の上に表われ、これを法則的に掴むことができるならば、解釈という技術をより経済的に正確にするであろう。この点では、語の単なる辞書的な知識を補い、それを生かすものである。

中世の「手爾波大概鈔」の中に助詞「や」に十類をたてその意義を説いたのをはじめ、それ以後のてには研究書で、例えば、富士谷成章の「あゆひ抄」で「紛はすべからず」として屢々注意し、本居宣長の「詞の玉緒」でも同様の注意をしているのは、この為であろう。そもそも、これらの研究書の目的は、古語で和歌を作り、古典を正しく解釈するにあつたことは、その序文等からも明らかである。厳密な文法論を編んで、古文を全品詞に分解することでは決してなかつた。その意味では、この特集で意図する「古典解釈に役立つ」という目的と方向を一致する。

そこで、私はここに与えられた課題の解答を考えるに当つて、品詞論として進んで来た規範文法の枠をはなれて、もう一度目的を同じくする江戸時代の成章や宣長の研究書に戻つて、そこから改めて出直そうと考える。彼らの研究が「てにをは」(助詞・助動詞や接尾語や形式語)を中心としたという事実は、まず、この課題の範囲を明らかにしてくれる。古典解釈での語の文法的な識別には、これらの語が最も重い位置を占めているからである。彼らの好みや偶然によるものではなく、解釈技術より必然の結果として出て来たものであると信ずる。

手爾波大概鈔から姉小路式・てにをは義慣抄、また栂井道敏のてには網引網をへて宣長の詞の玉緒、成章のあゆひ抄等のてには研

究書の中で、この課題の拠所とできるのは「あゆひ抄」である。宣長の研究の中心は係り結びであるから取り扱いの範囲が狭い。成章のあゆひ抄は、それ以前のてにはの研究をもとり入れ彼の創意によつてすべて百六十四語を集成し分類している。宣長の流れを汲む研究は、その中心は活用研究に偏り、成章の研究がその明晰、精密な結果にも拘らず、後に引継がれなかつたのは、再考の要を覚える。

あゆひ抄（安永七年一七七八刊）は用語が難解なのが欠点である。本稿で引用するに当つては次の約束に従つて原文を改め読解の便をはかつた。

一、術語は今日の文法用語の概念と必ずしも一致しないが、便宜上左記とする。

あゆひ→辞　名→名詞　よそひ→用言　かざし→副詞　事→動詞　孔→ラ変動詞　状→形容詞　在→ナリ活用用言　たち居→活用　本→語幹　末→終止形　来→未然形　往→連用形　引離連体形　離伏→已然形　目→命令形（又は已然形）　文→物語歌→和歌　里・里言→口語・口語訳　心→意

二、原文の私意による説明には括弧を施した。

三、原文を書き改めることは避けたが、中略したり、順序を換えたこともある。

四、漢文のかなを漢字に改め、仮名遣いはもとのままとした。

五、濁点・句読を施した。

六、要点のみを示す時には必ずしも二～四に従わない。

○以下引用例文の出典はあゆひ抄のはそのまま挙げ、特記しないものは日本古典文学大系本による。

「あゆひ抄」に見える語の識別

「なむ」の三態

音節を同じくしながら、意味の全く異なる三種の「なむ」を識別することは、古典の読解には必須知識とされる。従つて「てにをは」研究書でその識別を説くのも当然である。「てには網引網」で「なんは二様あり」とし、「あゆひ抄」では、「紛はすべからず」として三種の識別を説いている。「あゆひ抄」は、意味の相違を語の承接、文中か文末にあるかの形の上に求めるが、その方法は今日にも通用している所である。次に抄出する。

【何なん】　上位の語は辞・動詞の未然形

口語訳〈テクレヨ〉といふ。世にこれを「願のなん」といひつけたれど、願にはあらで、只そつと誂ふる語なり。

待てといはば寂ても行かなむ〈イテクレヨ〉。強ひて行く駒の足折れまへのたな橋（古今）

この「なん」は「去倫（助動詞）」の「なん」と、その付く語によつて分ち難きことあり。用言の活用を知らぬ人は誤り易し。その中にも「言ひなん」「来なん」は助動詞、「言はなん」「来なん」は誂へといふ類は心得ぬはなし。また（エ韻の活用語尾）に付くものも、「つくまの祭疾くせなん」は誂へと見易きを、「乱れなん」「憂き目見えなん」などいふ時は、誠に悪しく詠みたる歌ならば詠み人自ら解かぬ限りは分かるまじきやうなり。始め終りをよく見合はせて心得わきまふべし。

「となん（係助詞）」は承け様殊の外に変りたれば見分き易し。師は常に助動詞をゆき声（平声）に、誂へをたち声（去声）に、「となん」を返り声（上声）に詠まる。

（あゆひ抄巻一誂屈）

【何ぬ】　上位の語は動詞の連用形

「いぬ」といふ事をつゞめていへる辞なり。「いぬ」とはここを去て彼処に行くをいふ語なり。辞にても此の意味を思ひ渡すべ

し。口語訳〈テシマウ〉〈ダンニナル〉〈ヨウニナル〉又所によりては〈テシマウタ〉〈様ニ成ッタ〉と〈タ〉文字を加へても心得べし。

活用

人知れずおもへば苦し。紅の末摘花の色に出で**なむ**〈テシマハウ〉（古今）

先の「なん」を「読へのなん」に紛はすべからず。くはしくは読屈にいふ。（巻四去嗇）

【何なん】上位の語は名詞・副詞・辞用言の連体形・形容詞の連用形・ナリ活用言の「に」形等

これを文の中にある「なん」といふ。助動詞「なん」「読へなん」に紛はすべからず。

いふべきことを押し出して確かに断る時に句の中にある語なり。物語には句の末にもあるは、下を含めたる意なり。又宣命の中に「なも」とあるも是なり。

物語には多く、歌には稀に見ゆ。連用形を承くる時、口語訳〈ナ〉といふ。名詞・副詞等を承くる時〈ガ、ナ〉といふ。連体形を承くる時〈ノガ、ナ〉といふ。後世には絶えて詠めるを見ず。全くただ言なるゆゑに歌に詠む時は必ず下に「と」と承けたり。

さくら花山に咲く**なん**〈ノガ、ナ〉里のには勝ると聞くをみぬが寂しさ（義孝集）（巻三　なん家）

その説き方を見ると、

1　承接の面から上位の語の違いを重視していること。

2　文中にあるか、文末にあるかを考慮していること。

3　多くの用例（引用文では一例しか示さない）をあげて帰納していること。

4　他の辞との複合した形をあげていること。（引用文では省略）

5　語義の説明とともに必ず口語訳を施している。口語訳をあてる心得については「大むね（序文）」に詳しい。

このあり方は、今日解釈に当って文法用語を充てることに急がしい態度よりのぞましい。右の文で、未然形につく「なむ」を「終助詞で願望を表わす」と説く文法書よりも「テクレヨで読え」と説く方に共鳴する。

6　位相（和歌と物語）に注意し、その異なりによって語の用いられ方に違いがあるとしている。（係助詞「なん」は物語にある凡語で、和歌では「と」をうけるとする）

7　時代の相違による別（引用文には見られないが、特に上代語との別）に注意している。

である。これらの点は、今日、語の文法的な識別をするに際しても通ずる方法である。以下「あゆひ抄」において「紛はすべからず」とする語を挙げる。その多くは、同音で所属（あゆひ抄では五つに大別したその所属）を異にする語である。（引用文中のａｂは私意による）

㈠　同音異所属語の識別

し　ａ　過去のし（サキダッテ）

袖ひぢてむすび**し**水の氷れるを春たつけふの風や解くらむ（古今）

ｂ　強めのし

ときはなる日蔭のかつら今日**し**こそ（ニ限ティツヨリモ）心のいろに深く見えけれ（後撰）

ａ（上位の語）辞・動詞の連用形、ナリ活用言の「なり」

「来し方のし」といふ。「然かのし」と紛はすべからず。今より古の事を言ひ、今日より昨日の事をいふ類なり。口語訳〈タ〉。詞の上に〈先ダッテ〉などいふ詞を添へてみれば紛はず。

b（上位の語）名詞・副詞・連用形・連体形・辞

此の「し」を「然かのし」といふ。中古より後はかならず「ぞ」「は」「こそ」「か」「も」などの辞に続き、さらぬは下に「ば」とうけたり。口語訳に〈コレニカギッテ〉〈キッパリ〉などいふ。いづれも（訳語の）あたるとあたらぬとあり。又〈ソノヤウニ〉〈此ノヤウニ〉などいふにもあたれり。これみな「しか」の心を思へてあつるなり。

強めの「し」は平安時代には係助詞と重なるか、下に「ば」で受けるかのいずれかであるから同じく連用形を受ける形でも過去の「し」と識別できる。この下を「ば」で受ける形は、「ば」の上位語によつて二種に分けている。

a　予想で受ける場合。（「ば」の上位の語は）未然形、形容詞の連用形

君恋ふる涙し〈サヘ〉なくば〈ナイナラバ〉唐衣むねのあたりは色もえなまし　（古今）

「し」を〈サヘ〉と口語訳して、〈何サヘ何ナラバ〉又〈何サヘ〉〈何ウナラバ〉又常には〈何サヘ何タラバ〉ともいふべし。

b　既定で受ける場合（「ば」の上の語は）已然形

（イ）「し」を〈サヘ〉と口語訳す。「何ば」は口語訳同じ。

人のうへのこととし〈サヘ〉いへば知らぬかな　（後撰）

（ロ）「し」をめぐらし心得て〈モトヨリ〉〈ナニガ〉など含みて口語訳す。「何ば」を〈ニヨッテ〉と口語訳す。

〈モトヨリ〉さき初めし宿し恋れば〈ルニヨッテ〉きくの花　（古今）

「ば」がその上位の活用形によつて意味を異にし、

未然形＋ば……仮定　（雨降らば……）

已然形＋ば……既定　（雨降れば……）

となることは宣長が「詞の玉緒」で、

濁る「ば」に然る事をいふと、未レ然事をかねていふとの二つあり、既に然る事をいふは「花さけば」などのごとし。未レ然事をかねていふは「花さかば」などのごとし。既に然る事をいふ「ば」は「ども」と相対立し、未レ然事をかねていふ「ば」は上を転じて「とも」と対立せり。（巻三）

と説いているが、「あゆひ抄」で、

此例（已然＋ば）二様あるは、目のあたりのことを重くいへる（既定）と、ことわりの上にて軽くいへる（仮定既定を離れた）とにて、只「ば」の意によりて分るるなり。例へば、病をして「薬をさへ飲めばなほる」といふは（仮定既定を離れて）いへり。又「もとより良き薬を飲みてをる事なれば、なほらんこと疑なし」などいふは、目のまへを重くいふ（既定）なり。又「薬をさへ飲まばなほらん」といふは、一例（未然＋ば）のあらまし（予想）なり。

と説く方に卓見を認める。

ざり　「打消のざり」と「にぞ有りの約」

「物にぞ有ける」「しるくぞ有ける」を約して「物にざりける」「しるくざりける」など平安後期の人常に書けり。打消と紛はすべからず。（打消は未然形をうける）

ね　a「願のね」

鄙へさそはね　（頭輔集）

b「連用ね」

思はむと頼めし事もあるものを無き名は立てて唯に忘れね〈テシマヘ〉（後撰）

a　未然形を承く。上代の辞なり。

b　上位の語、連用形。口語訳〈テシマヘ〉又〈ヤウニナレ〉とい

ふ。詳しき意は「ぬ」にていふ。「願のね」は承さまも異なり。紛はすべからず。

以下要点のみをあげる。

けれ　形容詞のけれ

（例）　嵐の風は寒けれど

（形の特色）　形容詞の已然形

（意味）　口語と同じ。下に「ば」「ど」があれば〈イニョツテ〉〈イケレドモ〉

「来有」のけれ

時にこそ終にもみちぬ松も見えけれ

動詞・辞の連用形を受く

口語〈物ヂャ〉〈事ヂャ〉。又所によりて〈タコトヂャ〉〈タモノヂャ〉と心得る

（補　説）　連用形を受ける「けれ」は助動詞「けり」の已然形。「けり」の意味は今まで無意識でいた過去の事実、過去から現在まで続いている事実、目前の事実にはじめて気づいたということを感嘆をこめてのべるのが原義で、単なる詠嘆にも、非体験の過去の事実を物語るにも用いるようになつたとするが、他に諸説もある（本誌に二十二巻十一号古典解釈のための助動詞特集参照）。

けん　形容詞のけん

（例）　涙の滝といづれ高けん

（上位の語）　形容詞の語幹

（意味用法）　「からん」と読むに変らず。上代から平安前半までの語、それ以後は凝古的用法

過去推量のけん

ちはやぶる神の伐りけん

用言・辞の連用形

口語訳〈タコトデアラウ〉〈タモノデアラウ〉又〈タデアラウ〉。過ぎた事を推測していふ

（補　説）　形容詞の語幹につく「けん」の「け」は上代の形容詞未然形相当語尾で、「ん」は推量の助動詞。

たり　「とあり」の約

（例）　すみとげん庵たるべくも

（上位の語）　名詞

（意味用法）　「とあり」の約。〈トイフテアル〉と訳す。文章には見えるが歌には稀。「庵たる」も螢を隠して止むなく読んだもの

「てあり」の約

花散りたりと吹けばなりけり

動詞の連用形

「てあり」の約。口語では「テアル」は無生物にのみいひ、生物には「テイル」であるから、口語訳に当つては〈テアル〉〈テイル〉考へて当てる

（補　説）　名詞につく「たり」は断定の助動詞といわれ、連用形につくのは完了の助動詞といわれる。

なり　終止なり

（例）　人まつむしの声すなり

（上位の語）　動詞・辞の終止形

（意味用法）　口語訳〈ワイ〉*

連体なり

流るる水の帰り来ぬなり

名詞・副詞・辞・連体形（ナリ活用言の語尾もこの語である）

「にあり」の約。口語訳〈ヂャ〉又〈デアル〉。連体形をうけては〈ノデアル〉〈ノヂャ〉。「や」「やは」「か」「かは」「かも」「ぞ」「こそ」「も」の辞がつく時は「に」あり」ともとの二語に戻つてその間に入る

（補　説）　*「終止なり」は今日、伝聞推定説をとられる松尾捨治

郎博士以下の諸氏と、再び断定と情意との綜合表現とされる遠藤嘉基博士説とある（本誌助動詞特集号参照）。

らむ　推量のらん

（例）あまたにやらじとや春におくれて独り咲くらむ
光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

（上位の語）終止形、ラ変活用の連体形

（意味）人をみて心を知ると、木を見て花をおもふと、草を見て種を疑ふとの三あり

（補説）推量の「らん」は今日現在推量の助動詞とされる。下段の「らん」は形容詞の補助活用、完了の助動詞とされるが、一方に「良くもあらず」があり、古典解釈にはこの例とも同一に扱う方が都合がよい。

な　感動のな

（例）世の中に猶有明のつきなくてやみにまとふをとはぬつらしな〈イナア〉（後撰）

（上位の語）形容詞の終止形、又辞

（意味）口語〈ナア〉。人にいひかくる詞ながら思ひあまりてはひとりごとにもいふ

㈡　清濁に関する識別

有らんの約
いかで良からん
心知れらん人
上の語の終音節と「有り」との約。
其様を言ひすゑる語。無生物に〈アル〉生物に〈イル〉と口語訳す

禁止のな
今さらに山へ帰るな、ほととぎす、こゑの限りは我宿に鳴け
動詞の終止形
口語と同じ。偏に固くいさめたる意

音の清濁を区別して、濁音をさすことは、古典解読の基礎的な操作である。「あゆひ抄」では所々にその識別の要を説いている。

まじとまし　濁音

（例）堪ふましき明日より後の心地かな（定家）

（上位の語）動詞の終止形、ラ変・ナリ活用言の連体形

（意味用法）口語訳〈ソモナイ〉〈ハズデナイ〉。「べし」の打消の意。他の人・事・物にのみ用ひて自分に用ひないのが「じ」と異なる。「まし」と紛はすべからず」

（補説）未然形につく「まし」は一般に現在の事実に反することを仮想する助動詞という。しかし「む」と同じく予想を表わすのが本来の意で、「む」の形容詞的な派生語ともいわれる（浜田敦氏万葉集大成言語篇）。

てとで　濁音

（上位の語）未然形

（意味）「ずて」「ずして」と意大同。口語訳〈（ナ）イデ〉

清音
桜のなかりせば春の心はのどけからまし（古今）
動詞・辞の未然形
「ま」文字は「む」の活用したもの。予想し出した事に正しく向つていふ意。口語訳〈ウモノ〉

清音
用言・辞の連用形、ナリ活用言の「に」
口語と同じ。意は例へば紙にものを書き付けたやうに、行為が終つて後もその結果がある意

はとば

心得易い。物を区別していう。従つて物を問う語ともなつた。口

語と変らないから例をあげない。

a　清む「は」

（上位の語）名詞・副詞・連体形・連用形。但し、形容詞の連用形をうける時は、口語では「ば」というが、歌では清んで読む。

（意　味）

（1）名詞・副詞・動詞の連用形に付く「は」……口語同じ。

（2）形容詞の連用形に付く「は」……口語訳〈ナラ〉〈ナラバ〉。

例「恋しくは」*

（3）連体形に付く「は」……口語訳〈ノハ〉。例「いふは」

b　濁る「は」（ば）

（上位の語）已然形・未然形。

（意　味）

（4）已然形に付く「ば」……口語と同じ。又は〈ニヨツテ〉〈ト〉

例「いへば」

（5）未然形に付く「ば」……〈ウナラバ〉〈タラバ〉。例「いはば」

*（補　説）「くは」は奈良朝や鎌倉室町の資料の「クワ」など清音に表記されており、連用形に係助詞の付いたものと考える説がある（本誌二十三巻四号助詞特集号参照）。

㈢　複合助詞の識別

あゆひ抄では「継あゆひ」として、助動詞や助詞など辞の重なった形を多く説く。複合形の意味が、個々の辞の意味の複合を離れて新しい別個の意味を持つ語についてはもとの語との相違を見分ける必要があるからである。

かは

（上位の語）疑問の副詞、名詞・辞・用言の連体形をうけても、其上に遠くか近くかに疑問の副詞がある。

a　口語〈カハ〉を下の語に廻して、〈ゾイノ〉とつける。

意を反して落着く語（反語）

さく花は千草ながらにあたなれど誰かは〈カ〉春を恨みはてたる〈テアルゾイノ〉

b　疑問「か」の意の「かは」

詞の勢によりて「か」とよむべき所を「かは」とよめるもあり。

拾遺歌「別てふ事は誰かは始めけむ」の類なり。

反語と疑問とのあることは「やは」も同様であるが、但し、ともにaとbの間に形の上の差別があげてない。

もぞ

（上位の語）名詞・副詞・辞・連体形・連用形。

「ぞ」をめぐらして下に〈ウニ〉又は〈ワロイニ〉とつけて心得べし。

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱り〈ナドモ〉もぞする〈レバワルイニ〉

後の「もこそ」といふよりは詞の勢は急なるゆゑにや多くは上に「ば」とあらましてよめり。

この「もぞ」については詞の玉緒に詳しい。

a　これは行末をかねておしはかりてあやぶむ意のてにをは也。つねの「ぞ」と一つながら意は変る也。結びは常の「ぞ」に同じ。但し「ん」と結べる例はなし。「せん」などいふべき所をも「する」とやうに結びたり。

b　また、

立て思ひ居もぞ思ふ。紅のあかも垂れ（万「すそ」）ひきいにし姿を（新勅十四、万十一）

これはただ「も」の重なりたるのみにて常の「ぞ」と同意也。

上の格とは異なり、万葉には此てにをは猶これかれあり。古今

集よりこなたには此格は見えず

とあつて時代によつて区別できることを説いている。

もこそ

玉緒では、①行末をおしはかりてあやぶむ意の辞、②又同じことながらあやぶむ意なし、③ただ常の「こそ」の上に「も」の添つたもの、の三種をあげている。あゆひ抄でも、

a 「もや」と同じ、今すこし推しあてたる意あり。「こそ」をめぐらして〈何トモ何ウコトヂャニ〉と訳す。

人のうへの事としいへば知らぬかな君も恋ひする折も〈ナドモ〉こそあれ〈ラウコトヂャニ〉

b 「相対する」意。承け様はaと同じ。歌の意より分かつべし。「かかる事もあるに」とむかへていふ。

玉ぼこの遠道もこそ人はゆけ〈クコトヂャニ〉など時のまもみねは恋しき

c 「さもこそ何め」などいふ時、心得て〈ソレコソ何モアラウズレ〉といふ。

この外「もや」にも同意があり、この三つの相違については、「もや」「もぞ」「もこそ」三つの語、大体似たる内に、「もや」「もぞ」の二つはおしはかりたる心をのみよめり。但「もや」は願ひ願はぬ予想に亘りてよめり、「もぞ」は専ら願はしからずゆゆしき予想をよむにや。「もこそ」は右二の心にもかよひ、bcなどは予想ならぬ意をもいへり。

と相違をあげている。

㈣ 接尾語の識別

あゆひ抄にはいわゆる接尾語の類を「隊（ツラ）」として五分類の一にあげて、その用法・意味を説く。接尾語は造語要素として品詞論では対象外とされる。しかしそれぞれに一定の意味を有することは、助詞・助動詞や形式語と変りなく、古典解釈にはそれらの意味を把むことは有益である。あゆひ抄で識別に関して取り上げているのは、自立語との識別、接尾語間のそれである。

——み——み

a 水火（反対語）の「み」

神無月降りみ〈タリ〉降らずみ〈タリ〉（後撰）

b 「を——み」の「み」

人ごとを茂みこちたみ（万葉）

a （上位の語）反対語で皆連用形、但し歌には「下の何」は「……ずみ」と受けたるぞ多き。口語訳〈タリ……タリ〉。

b 万葉に「人ごとを茂みこちたみ」とよみたるはこれに似たれど反対語ならねば此の「み」にあらず。〈何ガ何サニ〉の重なれるもの。

——げ

（上位の語）連用形・ク活用の終止形・シク活用の語幹。

（意味）口語訳〈サウ〉。所によつて〈サウニ〉とも。他の人・物・事の上をみて、推測していふ語。

折とらば惜しげ〈サウ〉にもあるか、桜花（古今）

（識別）

①名詞に付いて「人げ」「物げ」などいひ、連体形に付いて「近からぬけ（清音）のうときなりけり」などよむは名詞で辞にあらず。

②〈サウニ〉は「べし」の訳語と同じ。「べし」は重く「げ」は軽いの差がある。

③「何がほ」と似たれど、「げ」は自然にその様子に見えるをいひ、「かほ」は心を思はせて様子を作るをいふ。

——もて

（上位の語）名詞・連用形等

（識　別）

（1）名詞に付く……「持字の意、以字の意」に通へり。大方「して」に変らず。口語〈デ〉といふ。

はちす葉のにごりにしまぬ心もて〈デ〉何かは露を玉とあざむく（拾遺）

（2）連用形に付く……将の字の意に通ふ。口語同じ。又〈テ*〉ともいふ。

露さむみうらかれもて〈テ*〉く秋の野に（千載）

（注）原文には京阪方言のモッテがあててある。

「あゆひ抄」の方法の検討

解釈の前提として、語の識別に「あゆひ抄」が取った方法は、語の承接が中心であることは右に抄出した諸例からも分る。その所説は部分的にはその後今日に至るまでの詳細な新しい研究によって補訂を要するものもあろうが、大綱において成功しているのは、承接による方法が今日にも通ずる妥当な方法だからである。

承接の相違を考慮することは国語における辞の性質から考えて本質的な事柄である。この方法によれば、当然上位語の性質が問われることになる。成章には、別に名（名詞）・かざし（副詞・接続詞・感動詞・代名詞・接頭語・辞を含む複合語）・よそひ（用言）の用意がある。よそひには活用による接続面の相違をも重視し、活用形・活用形式の相違に基く下位分類も考えている。よそひについて述べたという「よそひ抄」の内容は今日では知り難いが、活用一覧表ともいうべき「よそひ図」で大要は分る。かざしは「かざし抄」で内容を知ることができる。「かざし抄」に含まれる語の説明においては、配列は辞書式に五十音順であり、多義に亘る語意の説明も辞書的であって、かの「あひゆ」を接続語の相違・活用の有無によって五つに下位分類したのとくらべて極めて機械的であり、意味の相違に文法的な識別ができていない。例えば

また　二例あり。いづれも口語訳しても又といひならへり。一例又、ほかにの意（例歌略）

二例ふたたびの意（例歌略）

いま　四例あり。一例は必ず「今いくか」「今ひとたび」など、数の文字につづきたる時、口語に「い」をつづめて「ま」といふ。文に「今すこし」といふも此例なり（例歌略）。二例ハ、口語に〈ヤガテ〉〈オシツケ〉といふ。極めてほどなきをば〈インマ〉〈タダイマノマニ〉ともいふ（例歌略）。三例ハ、口語同じ。又〈タヾ今〉などいふにおなじ。但思ひやりたる心のうたをば、口語に〈イマゴロ〉といふにあてゝ心得べし（例歌略）。四例ハ〈今ヨリ〉といふべきを〈今〉とつづめたる也。口語に〈コレカラ〉といふ（例歌下略）。

のごとくである。「かざし」を下位分類して、今日のような接続詞・感動詞等とすることも、辞の承接からは意味が少ない。「名」についての書は知らない。凡そ名詞・副詞等、用言は、その語自身の各々意味と、いわゆる文法的な役割（語論としてよりも文節論的なもの、活用は文節構成のための語形変化）から生ずる意味とがあろう。しかし解釈に当って「語」としての文法的な識別は辞ほど有用とも思えない。「あゆひ抄」の「おほむね」には、いわゆる品詞の転成に関して、動詞の連用形の名詞法を「きしかた名」と述べ、また「かざし」が名詞・用言・辞に通うことを説き、

よそひ（用言）・あゆひ（辞）に通ふはしるく心得らるればいふに及ばず

といっている。一方、辞そのものへの関心、研究においては、まず同音の辞の多義を識別すること、同義語との識別にあった。大概抄の「や」に十品をたてたのをはじめとして、網引網の説き方等にも明らかである。成章は、これらを整理し分類した。こうしておく方が常に解釈・作歌の実用の場に利用するのに便が多い。成章は承接と活用（辞の本質的なものである）とより大別し、更に意味合の同じものか否かによって五分類し、

辞
- 名詞をうける…（活用がない）
  - 意味の似ている…属（五類）
  - もの
  - 「たぐひをもて集めた」もの …家（十九類）
  - 判断をあらわす…倫（六類）
- 名詞をうけない…
  - 活用がある
    - 「活用がある」辞…身（十二類）
  - 活用がない
    - （右二つに似ている）…隊（八類）

と組織づけている。（1）属と（2）家は今日の助詞に当り、そのうち（1）属は、「心をとりてすべた」もので意味の似ている語である。五つに分け、

咏――、疑――、願――、誂――、禁――、

とする。その多くは文末にあるか、または文中にもあるが、文末にもある辞である。「誂属」は動詞の命令形に当るもので、これらは文表現の相違に与るものとして大切な辞と私は考える。（2）家は右以外の助詞で、いわば文中にあつて語と語との関係や意味を添える助詞である。

ぞ――（こそを含む）、を――（を・ものを）、は――（ばも含む）、も――（もぞ・もや・もこそ・まれ・みを含む）、に――（にて・にしてを含む）、と――（てふ・とも・とすを含む）、し――（しぞ・しも・しこそ等を含む）、の――（がを含む）、へ――、ら――、のみ――（ばかり・までを含む）、だに――（すら、さへを含む）、より――（から・ゆゑ等を含む）、なん――、ごと――、もて――（してを含む）、がほ――、ながら――（までを含む）、がてら――

の十九類である。（3）倫と（4）身とは助動詞に当る。そのうち（3）倫は「ことはり」によつて集めたもので、「判断」をあらわす助動詞である。六つに分け、

可――、不――、将――、有――、去――、来――

とする。（4）は倫と大差なく、活用する点で（3）以外のものを集めたらしい。

て、し、めり、なり、ゆく、あふ、やる、かぬ、る（らる）、す、ごと、

の八類である。「る（らる）」「す」「ごとし」は次の「隊（接尾語）」に最も近く、「る（らる）」については、上の語と一緒にして全体を「る・れ」と活用する用言と見るよう述べている。（5）隊は今日の接尾語に当る。しかし解釈上大切なことは他の辞と同じと見ている。これらの中で、いわゆる複合助詞等を「継あゆひ」として取り上げ、「かも、かや、かは、やは、ものを、ものゆゑ、ものから、もや、もこそ、とす、せば」などを他の辞と同様に重視している。これらは解釈に当つてゆるがせにできない。その各々の助詞の意味がその複合によつて第三の新しい意味を持つているからである。成章のこの詳細な組織的な分類は、これからの「解釈のための文法」を考える上に必ずや有用であろうと信ずる。しかも大事なことは、この分類の根本には、解釈において「紛はすべからず」の語の識別に対する要求が有つたことである。

あゆひ抄では、識別の方法として他に、語が文中にあるか、文末にあるかの点も考慮している。「かさし、あゆひ」の名の由来を考えても、この考慮があるのは当然であろう。例えば、「ばかり」に「末ばかり」と「中ばかり」をいい、「中のや」を特示するの類である。しかし、この方法においては宣長の研究の方に大きな成果があがっていると考える。中世以来、語が文中にあるか文末にあるかは、続く語か切れる語かとうらはらであってこのことは、その初めから問われた。大概鈔で切字を注意し、網引網には、

てにはの義、数品あるやうなれども、所詮は切と続との二つ也。

文章に句読あるが如し。句読を弁ふればその理よく明らか也。

と述べ、宣長の係り結びの研究もこの流れの上に開花した。

古典の読解に当つて、文の終止を見つけて句点「。」をさすことはまず第一になされることである。「係り結び」の研究は、この切れの面での考察の雄なるものであり、また、詞の玉緒で「と」について、

「と」はすべて切るる語をつづくるてにをは也。さる故に、上のてにをはのととのひは、大かた「と」より下へは及ばざる也

といっている。(万葉集に「秋萩を妻どふ鹿こそ一子に子持有〈コモテリ〉跡五十戸〈トイヘ〉九・一七九〇」と「こそ」の結びが「ど」を通して「いへ」の方に行っている〈佐伯梅友博士、国語史上古篇〉のは例外で珍しいとされる、が考え方に諸説もある。〈本誌、二十三巻四号助詞特集号「こそ」参照〉)

「と」は続く性質の語としては大切なもので、その見きわめは解釈の上からもゆるがせにできない。特に、会話・心話・引用句等を承ける場合は、一度切れたものを包んで更に下に続ける。したがって「など」と共に、読解に当っては文の終止の見分けに次いで考慮される辞である。「あゆひ抄」でも、

詞のさしつづくを、中に隔てて明す語也。たとへば人の詞と自らの詞、又は名と名、事と事、又は名と事、歌と詞などなり、此ゆゑに、つねに中にのみある詞也。よみつめ(文末)にありとも、中にありとも中にある心にめぐらして心得べし(巻二、と家)

と説いている。

詞の玉緒に見える語の識別には、多くこの語の切れ続きという方法がとられている。語の承接については考慮が少ない。例えば、

ばや

天の川紅葉を橋にわたせばやたなばたつめの秋をしも待つ　(古今、四)

右の如くなる「ばや」はみな、「ばにや」といふ意也。また、くれなゐにしをれし袖もくちはてぬ。あらばや人に色も見すべき　(千載、十二)

右の如くなる「ばや」は「や」文字を下の語の切るる所へうつして、「か」にかへて見ればよく聞ゆる也。(巻四、ばや)

ばや

これはかくあらまほしと願ふ辞也。

さ月こばなきもふりなん郭公まだしきほどの声を聞かばや　(古今、三)

右条々「雑のや」なり。いづれも切るる故に下の結びにはかかはらず

で窺い知ることができよう。されば語の識別に当って重要な知識を提供している。次にその一、二を引く。

古今集春上の、

山たかみ人もすさめぬさくら花
ことならばさかずやはあらぬさくら花

の二首で、「ぬ」はともに打消で同一語であるが、「すさめぬ」は桜花へ続き、「やはあらぬ」は、上に「や」とあるから、切れてその

結びとなつている（巻一）と説いている。この区別を弁まえないと文意を把握し損うことになる、とは解釈に当つて屢々注意される。これは「連体修飾文節の中には係助詞は存しない」という文節の問題にも発展する。

また、切れる語についてみても、

紀の国のしららの浜に捨ふてふこの石こそはいはほともなれ。
（紫式部日記）

を「紀伊の国の白良の浜で抬ふといふこの小石こそはやがては大きな巌ともなれよ」（全釈）と命令に解したら誤である。玉緒に「思へ・行けなどといふたぐひ、上にこそなきときは仰する（命令）辞なるを、こそといへば仰する辞にならず」（巻五）と説く。「こそ」ば「は」とともに下につづいており、「なれ」はその已然形の結びであるから、「この石は巌ともなる」の強調文であることが分る。これを広く一般の文表現から帰納して「命令文には係結びは存しない」という文表現の種類との関係にも発展する。そうなれば、

一日、さき追ひて渡る車の侍りしを、〔廉越しに〕のぞきて、童べの急ぎて（童）「右近の君こそ。まづ、物見給へ。中将殿こそ、これより渡り給ひぬれ」といへば、又、よろしき大人出で来て
（源氏、夕顔）

の「まづ、物見給へ」は童が相手に対して命令表現をした語であるから、その上の「右近の君こそ」は係助詞「こそ」でなく、呼びかけの辞としてそこで切れている。すぐ下の「中将殿こそ」は下に続き「渡り給ひぬれ」で切れる強調の係助詞である、ということになる。また、

現には逢ふよしもなしぬば玉の夜の夢にをつぎて見え許曾
（万五ノ八〇七）

は、切れる語であつて、詞の玉緒に「こそといふのは願ふ辞なるを」「伊勢物語の歌に秋風ふくと雁につぎこせとあるこせは此こその転れるにて、同意なり」「ちりこすなゆめ」「こそなといへばまた勿れと願ふ意になるなり」など説く辞である（朝山信弥氏「希求の助詞「こそ」の攷」国語国文一〇ノ一に論あり）。

しかし、単に切れ、続きを識別するだけでは解釈には不十分であろう。

祭のころはなべて今めかしう見ゆるにやあらむあやしき小家の半蔀も、葵などかざして心ちよげなり。
（提中納言物語、ほど〳〵の懸想）

この文で、「見ゆるやあらむ」の「む」は、下へ続く語でなく、「や」の結びとして切れている。しかし意味上は下の「…心ちよげなり」の理由になつて続いている。これは、

祭のころは、……半蔀も……心ちよげなり。

の文の中に、挿入された句であろう。したがつて、「すべて今めかしう見ゆるにやあらむ」等の語群が、他の語群に対して果す役割を考える必要があり、続く語にあつては、どこに続くかを明らかにする必要がある

生ひ先なく、まめやかに、えせ幸など見て居たらむ人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて、猶さりぬべからむ人の女などは、さし交らはせ、世の有様も見せならはさまほしう、内侍のすけなどにて、暫しもあらせばやとこそ覚ゆれ。
（枕草子、生ひ先なく）

の中で切れる語は「こそ」の結び「覚ゆれ」と「と」の上の「ばや」で、他は続く語である。「ばや」は願いであることが分り、他語の意味も辞書の援用等で把握できたとしても、続く語乃至それを含む文節の続く承けるの関係が明らかにされなければ文意を摑めない。例えば次のごとく、

生ひ先なく
まめやかに　見て居たらむ　人は　思ひやられ　て
せ給ふなど　いぶせく
あなづらはしく

さりぬべからむ　人の女などは　覚ゆれ。
「A」とこそ

A「さし交らはせ
世の有様も見せ聖はさ　まほしう
内侍のすけなどにて　有らせばや」
暫しも

語の切れ続きは、それを含む語より更に大きな単位の関係を考えることに発展し、それらの関係の類型を考慮して、例えば主語と述語の関係、修飾語とされる語との関係、独立の語等々と整理され、組織づけられることによつて、はじめて文意が詳しく正しく把握されることになる。古典解釈には、「語」の文法的な識別は解釈の基礎的な操作であり、語意の把握をより経済的に正確にするものではあるが、もう一つ大きな単位、例えば文節等による関係に裏付けされてはじめて生きてくるものである。それ自身は、古典解釈の万能薬にはならない。この意味で、佐伯梅友博士が強調されるところの、文法で考えることを前述のように、㈠単語論、㈡文節論、㈢文論の三つとした場合、古典解釈にもつとも重くはたらくのはこのうちのどれだろうか、という事が問題になるであろう。私は、それは㈡の文節論だと考える。もちろん文法自身を研究の対象とする場合に㈠の単語論を他よりも軽く見るというわけには行かないはずであるが、今は古典解釈のためという条件のもとに考えているのである。（日本文法講座、解釈文法）

と説かれる立場に共鳴したいのである。

中世の古典解釈のために

「あゆひ抄」が対象とした資料は、平安時代の和歌である。「詞の玉緒」もそうであつた。しかし時代による差や位相による相違に考慮したことは所々に窺える。「あゆひ抄」が時代別をし六運を立て、上代語との相違を述べ、「文」との差を説いたり、「詞の玉緒」で「古風の部」「文章の部」に説くのはこの用意であつた。まず同一位相の同一時代の用法について考え、そこから帰納したものを物語日記等の文にも通用して考えようとした態度は学ぶべきである。しかしそれだけに説き尽くさない問題がある。

例えば、敬語に関する問題から拾つてみる。使役の「す」「さす」や自発・受身の「る」「らる」は、平安時代には尊敬の意にも転化した。その「す・さす」に尊敬の「給ふ」の重なつた「せ給ふ」「させ給ふ」は高い敬意の表現となるのに、

子どもは「いと見苦し」と思ひて、「背きぬる世の、去りがたきやうに、自らひそみ御覧ぜられ給ふ」とつきしろひ、目くはす。
（源、夕顔）

殿に帰り給ひても、とみにも、〔源氏ハ〕まどろまれ給はず、
（源、帚木）

など「れ給ふ「られ給ふ」と重なつた「る」「らる」は尊敬と見られる例がない（木枝増一氏高等国文法新講）。前者は受身であり、後者は打消を伴なつて可能の場合である。「あゆひ抄」には「常のたたる」に対して、いささかかしづきていう「かしづくたたる」を挙げるに止まる。「る」「らる」は平安時代には打消と共に不可能としてのみ用いられる（奈良朝文法史）ことも識別には大切な知識であろう。

また接続助詞「が」に関する言及もなく、次のような用法の「の」にも触れていない。

よきほどなる童の、やうだいをかしげなる、いたう萎えすぎて宿直姿なる、蘇芳にやあらむ、つやゝかなる袙に、うちすきたる髪の裾、小袿に映えて、なまめかし。

したがつて、「が」「の」の種々の用法の識別にも全き用をなさない。

中世における諸資料も、あゆひ抄をはじめ江戸時代の研究者の対象からは除かれていた。今昔物語のような片仮名交り文や、平家物語・方丈記のような和漢混淆文の読解には、かれらの研究書によるだけでは、語の文法的識別にも十全でない。例えば、

かくのみおこなはるるあひだ、おごれる心どもも出きて、よしなき謀叛にもくみしけるにこそ。(平家物語巻一)

是を以て、一向天台の仏法に帰し、併せて日吉の神恩を憑み奉らまくのみ。(同巻七、岩波文庫本)

の「のみ」の識別において、前者の文中にある用法と意味については、「あゆひ抄」に「名詞・副詞・辞・用言の連体形・連用形又ナリ活用言の「に」につく」とし、「口語訳〈バカリ〉といふ」「其一すぢにて外なきよしをいふ詞」とあるものである。しかし後者の文末にあつて切れている「のみ」はいかなる意味であるか。管見によれば、漢文の文末助字「耳」「而已」を訓んだことに生じた語で、語決ノ辞といわれるこれらの訓にあてられたために国語本来の「のみ」の用法と意味を失つて、単なる文末終止の語となつたものである。

若(し)人有(り)て之を軽毀して言ハマク汝は狂ヘル人耳。

(立本寺本法華経寛治元年点)

など漢文訓読資料には多く見られる。また、

かくのごときらの池は多と云とも魚のみあつて船はなし。

(延慶本平家物語)

の「ら」も、体言に付く接尾語と異なつた用法と意味を持ち、そのもとは漢文訓読語であり、

是ノ如キ等ノ病ヒ以ヲモテ衣服ト為ム(倭点法華経吉野朝期点)

のごとく、その資料にいくらもある。

又鏡トイハカ、ミトイフコトナリ(天仁法華百座聞書抄)

も訓読資料の、

「法住法位」トイハ是(れ)仏性の異名なり

(石山寺本法華義疏長保四年点)

と関係づけて考えることができよう。中世の和漢混淆文等が、その名のごとく、平安時代の和文的な用語・用法と、漢文的なそれとの混淆であるとすれば、一方の漢文訓読語についての識別や、その組織的な整理が、これらの文献の解釈のためにも用意されていなければならない。和歌を対象として得たものが物語にも自ら通ずると考えたようには、この位相語の整理にはあてはまるべくもない。もとの漢文の字面に制約されながら、強いて訓んだために、本来の国語の法格をも破った語が多いからである。前掲の「さくのみ」「ら」などもその結果生じたものである。また上代語がそのままか、複合形で残存するものが多い。「しむ」「いはく」「ごとし」や「いはゆる」「あらゆる」「あるいは」は説き古るされている。前掲のトイハのイは「あるいは」とは別に上代の助詞「イ」が複合形に残存したものと、私も考えている。(稲垣瑞穂氏説。後の「トイツパ」はこの古語トイハに促音が後に介入されたものであろう)。

これらは、目に馴れない語であるが、現在において親しんでいる語にもこの種の問題は多い。

此事天下ニヲイテ殊ナル勝事ナリケレバ(延慶本平家、一)

の「於いて」は、文法書によつては格助詞的に用いられた語と解か

れる。無論、

我身ノ上ヲサシヲイテ容モ思ヒ延タルヲ聞テ（延慶本平家、一）

の動詞とは意味・用法を異にすることは明らかである。「於いて」は単に「ニ」「ニテ」に相当する語であるから格助詞的とされるのは一法である。格助詞「ニ」はつねに続く語で、下の用言を修飾する。しかし、

草木愁タル色アリ、況ヤ霜陵ノ松ニオイテヲヤ（延慶本平家、十二）

の「おいて」は切れる語である。意味も「置く」とは異なる。これらを文法的にどう識別したらよいのだろうか。成章や宣長には一言も説明のないのは無論である。考えるに、この用法の語は、漢文の「情動ニ於中」「於ニ天下一」や「況於一乎」の置字を画一的にオイテと訓まれるようになつて（古くは「ニ」「ヲ」「ヨリ」、「ニシテ」等と訓まれた）、その語法が、和漢混淆文に流れ込んだためである。（拙稿、「古点の況字続貂」東洋大学紀要十二集乗）これらをもし文法的に識別するとすれば、和歌の用語から出発した文法論の梓を離れて、謙虚にもう一度、新しいこの資料に沈潜し、そこから出直すべきであろう。既成の梓にとらわれて無理をすべきでない。

中世の古文には、近代語の要素も既に生じている。

乗物ありけれ共、それにはのらで、「いまさら名残の惜きに」とて、少将の車の尻にのッて、七条河原まではゆく。（平家三）

男をうんでも喜歓する事なかれ。（同六）

今生でこそあらめ、後生でだにあくだうへおもむかんずる事のかなしさよ。（同一）

前二例の「で」は用言につき、最後のは名詞についているから、形の上で識別できる。無論意味も異なろう。第一のは未然形につき打消、第二のは連用形の音便について濁音化した「て」であることはいうまでもないが、第三のは和歌等の語法の梓にとらわれると識別できなくなる。

この例は平家物語成立と同じ頃生きていた東大寺の学僧宗性上人（建仁二年正応五年）の自筆草稿の中に、

唯火大ノ焼ニテ万物ヲ片時ニ灰燼ト為ス事ヲ候（春華秋月抄草、仁治二年一二四一ころ、現東大寺図書館在庫）

等があるから、平家の例も信ずることができる。この名詞につく「で」は、「御託宣にてましまさば（平家二）」などの「にて」の変化形で、国語史の上からも近代語を代表する一特色と見られる。（山田孝雄博士「平家物語の語法」、佐伯梅友博士「ニアリからデアル」へ〈国語学26〉）要するに現代語の「で」がすでに見えているのだということが分ればよいのである。

中世の古典読解にも、語の文法的識別は基本的な操作として大切なことであろう。しかし、それには資料の位相・時代を考えて、その中から新らしくえた整理結果によるのでなければ、既成の梓にとらわれる限り、識別の要は十分果されないであろう。この態度は中世以後の古典の解釈にも通ずることである。（東洋大学講師）